

但馬の地で酪農の発展を目指して

公益財団法人 中国四国酪農大学校 酪農科 1年 泉山 翔平

「最後まで諦めたらあかん。」これが私の父の口癖です。

私の家は、兵庫県の但馬地方にあります。今から約30年前に、父がこの但馬の地で酪農業を始めました。父が本格的に酪農経営をスタートするまでは、祖父が乳牛8頭を飼育していました。但馬といえば「但馬牛」という肉用ブランド牛が有名ですが、この当時、但馬牛の仔牛市は年に一度しか開催されておらず、但馬牛の繁殖経営をしても安定した収入を得ることが出来なかったそうです。そこで我が家では毎日収入を得ることが出来る酪農業を選び、この道一筋で頑張ってきました。

父はよく酪農を始めた頃を振り返り、「おじいさんの牛舎は道幅が狭く、飼料を運ぶのに小さいトラックに積み替えて運ばなければならなかった。これでは時間も手間もかかり非常に作業性が悪い。この問題を解消するために先祖から受け継いだ土地を利用し、自分の理想とする30頭を飼育できる牛舎を建設することを計画した。ところが牛乳の生産調整があったため、増頭することが出来なかった。資金面では農業近代化資金を利用したので困ることはなかったが、自分の土地でありながら様々な所で許可を得ることができなければ経営することができず、酪農業を営む難しさや不安をこの時感じさせられた。」と、当時の苦労話を私に聞かせてくれます。一方、経営スタート時には父と一緒に元気に働いていた祖父は現在80歳を過ぎ、「年をとったら何もできない。そんな自分が情けない。」と言い、今ではほとんど牛舎に来ることはありません。

このように、父や祖父が必死になって歩み続けてきた酪農の道、度重なる困難を乗り越えて守り続けてきた牧場の話を聞くうちに、私は「次は自分が酪農家としてこの牛舎を守っていこう」と考えるようになりました。

生まれた時から父や祖父の頑張る姿を見て育った私は、幼い頃から自然と父の手伝いをしていました。年齢を重ねるにつれて徐々に作業量も増え、今では責任のある仕事を任されることも多くなってきました。

牛舎では、毎朝決められた量の飼料を1頭1頭に与え、エサの食い込みを見て体調確認をします。牛はエサを食べなければ牛乳を生産できないわけですから、飼料給与というのは欠かすことのできない作業です。また、除糞も搾乳前に必ずしておかなければならない大切な作業の一つです。糞の状態を見ることで牛の体調の確認をし、床を綺麗にしておくことで牛が滑るなどの事故を防いでいます。こうした作業は単純で簡単なもののように思えますが、牛を健康で事故のないように飼うためには非常に重要なことなのです。

このような作業を父と一緒にする中で、次第に経営について興味を持つようになった私は、

ある日父に「安定した収入を得るために必要なことは？」と尋ねてみました。すると、父は迷わず「乳質改善と一年一産」と答えました。

私が手伝っている作業の一つに搾乳があります。ミルカーをつけようと牛に近づいた際に、牛に足を踏まれたり蹴られたりして搾乳作業が嫌になった時もありましたが、搾乳をしなければ収入を得ることができないわけですから、逃げ出さずに作業に取り組んでいます。しかも、ただ乳を搾るだけでなく、成分規格の検査でペナルティーが科せられないよう、乳房の洗浄、前搾り、ディッピング、バルククーラーやミルカーの洗浄など、毎日の衛生管理を徹底して行うことで細菌数が減少するように工夫しながら取り組んでいます。乳脂肪分などの成分はなかなか改善されません。乳脂肪分などの成分が低く基準を満たしていない牛乳は、通常より安価で取り引きされてしまうため収入減になります。つまり、安定した収入を得るためには、安定した高品質の牛乳を生産しなければなりません。また、酪農という仕事は、動物を飼養するだけでなく、牛乳という食品を製造する産業でもあります。加熱殺菌というたった一つの行程を経るだけで消費者の口に入るものを扱っているわけですから、衛生面に十分配慮し、安心・安全な牛乳を生産するよう努力し続けなければいけないのは当然の義務ですが、よりおいしい牛乳を生産することで近年の牛乳消費量の低迷を改善できるよう、給与飼料の見直しなど自分でさらに研究していき、乳質改善に努めたいと考えています。

「一年一産」という繁殖管理については、今まで経験した給餌や除糞、搾乳や機械操作といった作業だけでは繁殖についての知識・技術を習得する機会に乏しく、何となく避けて通っていました。以前、父からいきなり「人工授精してみるか」と言われた時も頭が真っ白になり、思わず尻込みしてしまいました。父は「失敗してもいい。失敗を怖がるな」と言ってくれましたが、人工授精の資格も持っていないし、失敗することへの恐怖で挑戦することができませんでした。後になって、せっかく父が与えてくれたチャンスをどうして無駄にしてしまったのか、失敗を恐れず経験しておけば良かった、と後悔しました。この時の悔しさをバネに、これから人工授精などの技術について積極的に学び、授精適期などの判断が確実にできるようにし、受胎率向上、一年一産が実現できるように頑張ります。

このように自分の夢に向かって取り組んでいる私の姿を見て、父が最も信頼している近隣の酪農家の方が、「牛は愛情を持って接すれば嘘をつかずに答えてくれる。自分の理想を努力次第で実現することができるのも酪農の楽しさの一つでもあるはずだ。」と勇気づけてくださいましたが、現実が厳しいものであることも十分承知しています。私の住む地域では、酪農家が5軒程度しかいないため、3日に一度、自分たちの集乳車で京都まで生乳を運び、出荷していたことがありました。但馬地域の酪農家が減少していることで、父への負担が増えていることも事実です。1人で酪農を営む父の姿を見てきて、酪農にはたくさんの可能性が秘められていると思う反面、私に本当に出来るだろうかと不安に思うこともあります。

しかし、そのような不安を抱えながらも、「諦めたら挑戦は終わる」という、私が尊敬している競泳選手の北島康介さんの言葉を胸に留め、父や祖父が歩み続けた酪農の道を私も歩んでいこうと決めました。

父が目指した「安定した収入が得られる酪農経営」を現実のものにしていくため、現在の成牛30頭という飼育頭数を維持しつつ、一年一産の実現と誰にも負けない乳質の牛乳作りに取り組み、堅実な経営を目指していきます。そして私の経営を通して、酪農業という仕事が決して辛いだけでなく、一定の収入を確実に得ることが出来る産業なのだ、という魅力を伝えていくことで、地域に後継者となる若者たちが増えるきっかけ作りに貢献していきたいと思います。

また、私の家は現在、ほぼ購入飼料に頼った経営をしているため、飼料価格の変動に経営が大きく左右されてしまいます。そこで、後継者不足から利用されていない耕作放棄地などを利用して自家栽培の牧草作りに取り組み、糞尿は堆肥化して和牛畜産農家と共に田畑に還元していく「但馬式地域循環型酪農」を訴え、地域で共に助け合う酪農を目指していきたいと思います。

近年、経営者の高齢化や後継者不足、生産調整や飼料価格の高騰などで離農する酪農家が急増しています。また、日本のTPP参加が現実のものとなれば、日本の酪農を取り巻く環境はさらに厳しいものになっていくと思われます。しかし私は「最後まで諦めたらあかん」の父の言葉を信じ、＜但馬地域に酪農あり＞と言われるような活動と但馬の酪農を支えていく人材になりたいと思います。